

復興のソーシャルディベロップメント 「ISHINOMAKI 2.0」

Social Development in Restoration

西田司 Osamu Nishida

震災前から僕が大切に読んでいた本に、2008年に刊行された『シビックプライド』がある。世界のさまざまな都市のコミュニケーションデザインをわかりやすく紹介している事例本だが、その前文に監修者の伊藤が本で紹介した都市の特徴を書いている^{*1}。この本の影響からか、僕は都市を大きな視座(歴史や慣習、計画、マスタープラン等)で見たり考えることと同じくらい、小さな個人や小さな主体の実感ある言葉や行動や取り組みや未来の可能性に、まわりの人が共感し、新しい集まり方が生じる状況に都市空間の現代性を感じている。

石巻市は今回の被災都市のなかでは仙台市、いわき市に次ぐ人口規模であるが、被災の規模の大きさと中枢部の被災という点では最大の都市である。中心市街地と産業中枢ゾーンの大半が被災し、さらに半島部も多大な被災をした。

津波の被害を受け、店舗の1階部分が完全に水没した石巻中心市街地に僕たちが訪れたのは震災後1カ月ほど経った時期だった。そこで出会った被災した商店主や若い住民たちは、ド口を掻きつつ、「災害に強くしても、人がいないまちに戻してどうするんだ？」と本気で自分たちのまちを動かしていこうとしていた。

実は、商業など生活関連機能は、イオンなどが集中する郊外部に依存することになり、震災以前からの中心市街地の空洞化が加速していたらしい。

未来につながる実感 わたしの石巻

このレジリエンスを発揮しはじめてい

る個々人の志をもっと広く共有できないかと考え、まだ電気も通っていなかった当時、動き始めた住人一人ひとりに話を聞き、彼らが語る「わたしの石巻」(オランダの「I amsterdam」に倣っている)を集めフリーペーパーとして制作し配布を始めた^{*2}。復興に留まらない、これからの地方都市の姿を考えたいと思ったからだ。この「VOICE」と名付けられたフリーペーパーには毎回10名前後が出演し、これまで4号計50名ほどが、さまざまな立場から、震災前からの課題(空洞化や少子高齢化など)を克服し、状況をプラスにとらえる姿勢や新しい可能性やまちを楽しくする価値など、未来につながる実感を語っている。

Do It With Others まちをひらく

今回の震災により、まちから出て行った人も多くいるが、逆に震災を契機として外部から大勢の専門家や学生等のボランティアがまちを訪れ^{*3}、地元を離れていた青年層も戻り、地元有志との交流によるさまざまな新しいチャレンジが生まれている。2011年6月に地元の若い商店主やNPO、建築家、まちづくり研究者、広告クリエイター、Webディレクター、学生など多様な若者が集まり復興の先に未来の石巻をつくる組織体「ISHINOMAKI2.0」を設立し、被災した中心市街地で従来行っていた小売や飲食の営業フレームから一歩踏み出し、さまざまな新しい取り組みを始めている。

オープンシェアオフィス「IRORI石巻」

オンデザイン代表、東京大学非常勤講師/1976年生まれ。横浜国立大学卒業。「ヨコハママパートメント」日本建築家協会新人賞(2011)、「ISHINOMAKI2.0」グッドデザイン復興デザイン賞(2012)、地域再生大賞特別賞(2014)受賞ほか

は、被災したガレージを改修したシェア拠点であると同時に、ISHINOMAKI2.0や復興を機にU/Iターンした層^{*4}の外部リソースと地元の人や場所や活動をつなぎ、新しい交流や事業を醸成する連環場である^{*5}。市民工房として始まった「石巻工房」は、被災した個所をDIYで修復する技術や方法をまちに提供し、自分でつくれる実感とそれによる愛着を醸成している。同時に東京や世界のデザイナーと連携しDIYでつくれるベンチなどの家具を発表し、産業としてのものづくりを定着させている^{*6}。ITラボとしての「イトナブ」は地元高校生と東京のITエンジニアがインターネット通話で常につながり、IT技術を学びながら、まちを楽しむ目線で新しいソフトウェア開発を行い、次世代クリエイターを育てている。震災前まで、まちに立ち寄ることのなかった高校生たちの新しい溜まり場となっている^{*7}。これらは、従来型のまちづくりとは異なるアプローチで震災前にはまちにかかわっていなかった人を巻き込み、まちなかにおける居場所づくりやアクティビティづくりを実践している。

新しいパブリック 出番と居場所

復興の経過とともに活動の種類も増え、去年は地元のお母さんの家庭料理をシェアする「日和キッチン」や、映画好きの集まる仮設の映画館「金曜映画館」、本好きが本を紹介するコミュニティスペース「まちの本棚」^{*8}など取り組みの幅が広がり新たな拠点も生まれた。これらは決



図1 フリーペーパー「石巻 VOICE」



図2 「IRORI石巻」[撮影：鳥村鋼一]



図3 「まちの本棚」[撮影：布田直志]

してまちづくりを誘導して生まれたわけではない。むしろ「まちづくり」という言葉にキョリを感じていた人たちが、自分の日常の延長で始めた活動がまちに拠点を持ち、活動がまちの価値を高めている。ここにあるのは、出番と居場所である。工房スキルの上がった人もIT技術を高めている高校生も彼らが動くことにより影響は拡大し、共感石巻に留まらず、他地域や世界とつながり広がっている。「VOICE」も同様だが、一人ひとりの実感を持った言葉や活動の積み重ねが集合したときのエネルギーは磁力のようである。インターネットで場所を離れた共感者とつながれる時代での新しい連携が生まれ、そこにリピーターや在外での石巻フォロアアが増え、新しい協働の仕組みや離れた場所からのまちへの参加が始まっている。これらまちのソーシャルディベロップメントは、これまでの復興計画では描かれていない。しかし今回の震災では、被災にあった土地がもともと抱えていた社会的課題を同時にとらえていく視点が必要であった。復旧期の間は従来型の復興計画が主流であったが、今後まちが平常になっていくなかで社会環



図4 「石巻 STAND UP WEEK 2014 未来づくりの見本市」

境と復興計画とを横軸につなぐチャレンジが必要となる。その先には主体形成型の新しいパブリックを内包した中心市街地再生モデルを実践する未来が期待できる。

シビックプライド もっと都市は楽しくなる もっとまちが好きになる

先月、石巻で復興の寄付金を地元のチャレンジに提供するコンペティションが行われた。20以上のプロジェクトがプレゼンテーションしたなかで、一位を獲得したのはまちなかを舞台にしたファッションショーを企画した女子高生だった。彼女たちは服飾を学んだり楽しんだりするフィールドがない現状に対し、自分たちできっかけをつくろうとしている。その未来をつくる思いに分野横断的に専門家が参加し、実現まで高めていく社会環境こそ、今の石巻の強みである。

僕たちは今夏、このファッションショーをはじめ、さまざまな主体が3年間に取り組んできた日常を楽しむ企画や拠点を一覧できるイベント「未来づくりの見本市」を石巻最大のお祭り「川開き祭り」に合わせて行う⁹。若手料理人や若手漁師など新しいインベーターや老舗、商店街、クリエイター、高校生や大学生と一緒に Google や Yahoo、apbank、アーキエイドなど継続的にまちにかかわる企業や団体も参加し、さまざまな主体が日常から生まれた未来へのアイデ

アをハレの場でシェアし、業種や世代をまたいだポジティブな上昇気流を生み出そうとしている。

復興にかかわると、語られるまちの未来は、防災や減災も含め、被災解決型の機能側面が多い。本質的かつ技術的なアプローチと理解しつつ、その未来の可能性を僕たちは、一人ひとりの出番と居場所の醸成とともにグンと押し広げていきたい。未曾有な体験がもたらした都市の未来を考える時間。時計の針が10年進み、地域課題が一気に押し寄せたとされるこのまちで、多様な主体が実感するブレイクスルーの原型を日々模索している。

注

- *1 伊藤香織＋紫牟田伸子監修「シビックプライド 都市のコミュニケーションをデザインする」(宣伝会議、2008)「あなたのまちは愛されているだろうか。そこに住み続けたい、そこで働くことが好きだ、そこに遊びにいきたい、と思われているだろうか。まちのために何かしたいと思っている人がいるだろうか、そうした人たちが活躍できているだろうか。そのまちは、わくわくするような予感に満ちているだろうか」(前文一部抜粋)
- *2 「石巻 VOICE」と名付けられたフリーペーパー(図1)
- *3 2011年の1年間に、石巻には延べ28万人の災害ボランティアが来訪し、ドロボキをはじめ、まちの復旧に尽力している
- *4 石巻では、震災後3年で、住人が2,000人ほどしか居なかった中心市街地に、1ターンUターンを含め新住民が200人以上増え、ローカルパワーの担い手となっている
- *5 「IRORI石巻」には、地元住民、高校生、来街者、企業、団体、メディアなど、さまざまな主体から企画や思いが持ち込まれる。石巻経済新聞とラジオ番組で発信も行っている(図2)
- *6 石巻工房は、世界の家具見本市「ミラノサローネ(伊)」「メゾンドオブジェ(仏)」に出展し海外でも評価を得ており、今年から生産ラインの拡大により新しい雇用を生んでいる
- *7 「イトナブ」は、googleなどのトップクリエイターも講師として参加しており、ITを学びたい高校生が地元以外からも来訪している
- *8 「まちの本棚」は、一箱古本市という参加型イベントから始まった本好きが集まる拠点。本の貸出し、販売、イベントを行っている(図3)
- *9 「石巻 STAND UP WEEK 2014 未来づくりの見本市」7/25～8/1(川開き祭り)@石巻中心部、牡鹿半島、雄勝ほか 詳細はWebで。ishinomaki2.com(図4)